

札幌農学校旧蔵の英書について

—— 北海道への英学導入史研究の一環として ——

外 山 敏 雄

(1)

明治初年の高等教育機関の開設とともにわが国の英学は急速に進展するが、それら各校に入った英書が英学導入の重要な窓口となったことは疑いない。

これまでは主に人的な面から札幌農学校の英学をとりあげてきたが、今回は物的な面、その中でも教育上最も重要な tool である図書的面を見ることにする。これまでの研究の一環として同校草創期の所蔵英書を調査し考察を加えてみたい。

W.S. Clark は、開拓長官への報文に次のように書いている。¹⁾

‘A large number of new library and scientific works are almost indispensable for the use of both professors and students. Books are their implements, without which they can do but little.’

Clark が蔵書の充実に意を用いたことが窺われるのである。

この学校の開校は今を去る 1 世紀と 1 年の明治 9 年 8 月のことであるが、閲覧室（当時読書房と呼ぶ）はその 1 年後に始めて使用に供されている。

年報には

「曁官及ビ生徒ハ午前八時ヨリ日没ニ至ルマデハ該房ヲ使用スルヲ得ベシ」

と使用時間があげられている。²⁾

当初図書館の運営にたずさわったのは次の人々である。〔『第二年報』（明治 11 年 3 月発行）から『第四年報』（明治 13 年 3 月発行）まで〕

洋書部典籍	島根縣	井川	洵
和漢部典籍	静岡縣	長尾	布山

豫科英語教官	島根縣	井川	洵
豫科和漢学教官	静岡縣	長尾	布山

英語・国漢の教員がそれぞれ洋書・和漢書の係を受持っていたことがわかる。『第五年報』（明治 14 年 3 月発行）では、

書籍係	大島正健・長尾布山
-----	-----------

数学教授	大島正健
------	------

と 1 期卒業の大島が井川の後を継いでいる。³⁾ 明治 13 年からは大島が洋書の係を担当したので

ある。

さて、所蔵の図書はどのように用いられたのであろうか。『第二年報』に

「此等ノ書籍ハ多クハ参考書及ビ授業用ニ供スベキ課業書ナリ」

と、その目的や性格がはっきり記されている。⁴⁾ また、「文庫規則」の中に次のように定められている。⁵⁾

「諸課要用ノ課業書ハ其課業ニ従事スベキ一期間ヲ限り之ヲ貸渡スベク其課業ノ大試験ヲ終ル後ハ直ニ之ヲ返納スベシ」(第二条)

今、年報の記事から草創期の所蔵冊数を調べてみると、

(英文)	第2年報	(明治11.3発行)
(和文)		
和漢書	約 5,100	
	(ママ)	
洋書	3,737	
(内英書)	(3,313)	…… 初年度より 106 の増
(英文)	第3年報	(明治12.3発行)
和漢書	1,500 以上	
	(ママ)	
洋書	約 4,300	
	(ママ)	
(内英書)	(約 3,900)	
	(ママ)	
(英文)	第4年報	(明治13.3発行)
和漢書	8,815	} …… 前年度より 440 の増
洋書	4,635	

となる。教員・学生教⁶⁾ からみて非常に潤沢であったと言える。

(2)

北海道大学図書館北方資料室内に今日「札幌農学校旧蔵文庫」がおさめられており、当時の蔵書の多くは閲覧が可能である。

さて、英文の第一年報から第四年報までに、各年度に収蔵された英書のカタログが掲載されている。⁷⁾ 書目は著者名によるアルファベット順に排列されており、記載事項は、

著者の family name および first name, 書名, 巻数, 所蔵部数

である。刊行地・刊行年については記載がない。書名は、ごく短い場合は別として、ほとんどが短縮略記されている。

以下に述べるように、この洋書目録を仔細に調査したが、次のような点で非常に不完全なものと言わねばならない。

- ① 分類目録が併載されていないこと。
- ② 記載事項に誤があること。
- ③ 著者の first name の脱落がかなりあること。

②については、第一年報所載分では、著者名に4カ所、書名に2カ所の誤があり、著者名によ

るアルファベット順の入れちがいが見られる。校正が不十分であり原稿も不完全であったものと思われる。

このように年報所載の英書目録は不完全なものであるが、さいわい北方資料室所蔵の『明治三十四年 札幌農学校公文録 第一冊 自明治九年 至明治十七年』に、明治17年7月調べの「洋書目録」(和訳、毛筆書き)がとじ込まれている。記載事項は著者名、書名、部数、1部の冊数、総冊数で、書目に一連番号がうたれている。書目の記載順は不同である。

札幌農学校では、(1)で見たように、開設当初に相当数の英書が一挙に収蔵される。その後は徐々に追加されてゆくのである。それ故本調査では自然力点が初年度に収蔵された英書についての分析におかれるであろう。

調査の第1段階では当然書目の確認が必要であろう。年報所載のカタログの記載が不完全だからである。年報所載のカタログを補うものとして上記の公文録の記載がある。そこで、年報所載のカタログと公文録の和訳目録の各書目を1点ずつつけ合わせて見ることにした。両者の照合によって大部分のものを確認することができた。なおその過程で、年報のカタログに2巻物・3巻物等の記載の脱落もかなりあることがわかった。

調査の第2段階は、第1段階で確認した英文第一年報所載分をすべて部門別に分類して統計を出す作業である。分類の作業は多くの困難を伴ったが色々な手段を講じて1つ1つ分類して行った。当然のことながら、カタログ記載の書名だけでは内容が判定できないものが相当数出てきたが、それらについては「旧蔵文庫」の図書カード並びに実物に当たってみた。分類項目の設定は、蔵書の書目をよく勘案して、この場合に適合する実地的なものを考えた。作業に当たっては十分慎重を期したつもりである。次の表がその集計結果である。上から総冊数の多い順に排列してある。中間の欄は、つまり、各部門の点数である。⁸⁾

< 英文第一年報所載分の分類統計 >

	部数の合計	巻数の合計	総冊数
語 学	909	37	909
数学・物理・化学	647	118	680
地理・紀行・風俗	349	96	443
歴 史	379	80	414
工学・工業・鉱業・鉱山・技術	205	193	229
百科・人名辞典	23	54	75
動物・植物・地質・鉱物	63	22	63
伝記・逸話	57	11	60
農学・農業・獣医・畜産	50	32	52
宗 教	34	41	48
政治・法律	33	42	47
哲学・倫理・思想・心理	44	16	44
経 済	35	11	37
文 学	19	32	32
医学・解剖・生理	27	7	27
家庭・児童	15	7	15

軍事・戦記	9	12	12
天文・気象・地球物理	9	10	10
芸術・芸能	5	10	10
商業・貿易	5	4	5
教 育	5	5	5
薬学・薬品	2	3	3
合 計	2,924	843	3,220

この分類統計表から色々なことがわかる。総冊数では語学関係が最も多いが点数は多くない。つまり、先の年報の記述にもあったように、教室で教科書として用いるため同じものが多くの部数揃えられたのである。教科書に用いたとみられるものが多いのは、そのほか、数学・物理・化学関係、地理・歴史関係などで、いずれも基礎的分野のものである。これらの分野のもので総冊数の75.9%を占めているのである。これは、当時の同校の教科課程が、今日で言う一般教育関係の科目に多くの時間数をとっていること⁹⁾とも無関係ではないであろう。逆に、点数が多いのは、工業・鉱業・技術関係である。ほとんどの書目が1部ずつであり、語学関係などとは対照的に参考書としての性格の強い部門である。専門の農業関係は予想に反して少ないが、また文学関係なども数の上では意外なほど少ない。

以上、英文第一年報所載のカタログによって開校の初年度に収蔵された英書について分析を加えてみた。

(3)

前節における分析から、当時の所蔵英書を

- 1) 教科書として使用するためのもの
- 2) 学習の参考に供するためのもの

の2つの範疇に分けて考えることができることがわかった¹⁰⁾が、以下、開校から4年目までに収蔵された英書の中から英学史上重要と思われるものを2つの範疇に分けて見てゆきたい。

まず、第1の範疇に入るもの（教科書として用いた可能性の強いもの）をあげてゆく。書目は英文年報記載のままである。なお、()内の和訳書目は公文録とじ込みの「洋書目録」記載の書目をそのまま示したものである。

< 第 1 年 報 分 >

1. Corner, Miss, *History of England and Wales* (コルネル氏 英国史) 41 部
2. Goodrich, S.G., *Common School History of the World* (グートリッチ氏 万国史) 19 部
3. Goodrich, S.G., *History of Rome* (グードリッチ氏 羅馬史) 23 部
4. Goodrich, S.G., *History of Greece* (グードリッチ氏 希臘史) 9 部
5. Goodrich, S.G., *History of United States* (グードリッチ氏 合衆国史) 16 部
6. Goodrich, S.G., *History of England* (グードリッチ氏 英国史) 26 部
7. Goodrich, S.G., *History of France* (グードリッチ氏 佛国史) 19 部

8. Guizot, F.P.G., *History of Civilization* (ギゾー氏 開化史) 16 部
9. Hart, J.S., *Language Lessons for Beginners* (ハート氏 文典) 19 部
10. Hart, J.S., *English Grammar and Analysis* (ハート氏 小文典) 20 部
11. Jacobs, J.A., *Learning to Spell* (ジャコップ氏 スペル讀本) 26 部
12. Lennie, Wm, *English Grammar* (レンニー氏 小文典) 29 部
13. Morell, J.D., *Grammar and Analysis* (モレル氏 文典) 22 部
14. Quackenbos, G.P., *History of the United States* (クエッケンボス氏 大合衆国史) 16 部
15. Quackenbos, G.P., *Grammar* (クエッケンボス氏 大文典) 34 部
16. Quackenbos, G.P., *First Lessons in Composition* (クエッケンボス氏 小作文書) 20 部
17. Quackenbos, G.P., *Natural Philosophy* (クエッケンボス氏 窮理書) 46 部
18. Quackenbos, G.P., *Course of Composition and Rhetoric* (クエッケンボス氏 大作文書) 20 部
19. Quackenbos, G.P., *First Book in Grammar* (クエッケンボス氏 小文典) 80 部
20. Quackenbos, G.P., *Primary History of the United States* (クエッケンボス氏 小米国史) 16 部
21. Walker, J., *Pronouncing Dictionary* (和訳「洋書目録」に記載なし) 15 部
22. Wayland, F., *Elements of Political Economy* (ウエーラント氏 經濟書) 8 部
23. Wayland, F., *Moral Science* (ウエーラント氏 修身書) 19 部
24. Webster, N., *Royal Octavo Dictionary* (ウェブスター氏 小カランチング英辞書) 15 部
25. Webster, N., *Spelling Book* (ウェブスター氏 綴書) 109 部
26. Wilson, M., *First Reader* (ウ井ルソン氏 第一リートル) 161 部
27. Wilson, M., *Second Reader* (ウ井ルソン氏 第二リートル) 80 部
28. Wilson, M., *Third Reader* (ウ井ルソン氏 第三リートル) 49 部
29. Wilson, M., *Fourth Reader* (ウ井ルソン氏 第四リートル) 10 部

＜ 第 2 年 報 分 ＞

30. Hume, D., *Student's History of England, Abridged* (スチューデント 英国史) 10 部
31. Lord, J., *Modern Europe* (ロルドル氏 今世歐洲史) 42 部
32. Markham, Miss, *History of England* (マークハム氏 英国史) 20 部
33. Parker & Watson, *National Third Reader* (パーカル氏 ナショナル第三リードル) 26 部
34. Parley, P., *Universal History* (パーレー氏 萬国史) 63 部

＜ 第 3 年 報 分 ＞

35. Haven, J., *Mental Philosophy* (ヘゾン氏 心理学) 12 部
36. Perry, A.L., *Elements of Political Economy* (ペーリー氏 經濟学) 16 部
37. Shaw, T.B., *English Literature* (シャウ氏 英文学) 10 部

以上、第1の範疇に入るもので英学史上重要であると思われるものをあげてみた。なお、上に〈第2年報分〉としてあげたものは、英文第2年報に掲載されているものであるが、貸出中のために第1年報に掲載されなかった前年度の追加分である。第4年報掲載のものの中にはとりあげるべきものが見られない。

『文部省第一年報』(明7)には開成学校英法科予科の教科書があげられている。いま、ここに示されている20点の英書のうち、札幌農学校でも教科書として用いた可能性の強いもの(上記の37点の中に含まれているもの)をさがしてみると、5, 8, 22, 30, 36の5点の英書が見出される。

(4)

次に、第2の範疇、つまり、学生・生徒の学習の参考に供するためと見られるものについて見てゆきたい。とりあげるものは英学史の上で重要視すべきものに限ることとし、それらについて、それぞれページ数、刊行地、刊行年を北方資料室所蔵の実物や図書カードに当って調べて付記しておく。なお、この第2の範疇については、同時代の他の高等教育機関、東京大学・東京開成学校の場合との比較もしてみたい。¹¹⁾ 以下、部門毎に見てゆくことにする。

＜ 文 学 ＞

1. Shakespeare, Wm, *Complete Works of Shakespeare*, 13+1027 pp. (第1年報)
(セーキスピユルス氏 コンプリート・ワーク)
2. Bunyan, J., *The Pilgrims Progress, with a life of John Bunyan, by Robert Southey*, 93+348 pp. (第1年報) (ブンヤン氏 天路歷程)
3. Byron, Lord, *Poems by Lord Byron*, 32+719 pp., London (第1年報) (バイロン氏 詩集)
4. Milton, J., *The Poetical Works of John Milton, with memoirs, explanatory notes*, 24+581 pp., London, 1868 (第1年報) (ミルトン氏 詩学)
5. Dickens, C., *Works of Charles Dickens*, New York, 1870; Contents: Christmas Stories, etc. (第1年報) (テッケン氏 クリスマス・ストーリー)
6. Dickens, C., *The Adventures of Oliver Twist*, 171 pp., New York, 1876 (第3年報) (デッケンス氏 オリバル・ト井スト)
7. Dickens, C., *Pickwick Papers* (現存せず) (第3年報) (デッケンス氏 ピック井ック・ペーパー)
8. Talfourd, T.N., *Works of Charles Lamb*, 2 vols. (現存せず) (第3年報) (ターフォート氏 チャーレス・ラム著書)
9. Murphy, A., *The Works of Samuel Johnson, with essays on his life and genius*, 2 vols., 30+12+570 pp., 699 pp., New York, 1873 (第3年報)
(ムルフェー ジョンソン氏著書)
10. Longfellow, H.W., *Poems of Places*, 29 vols., Boston, 1877-79 (第4年報) (ロンクフェロー氏 各所之詩)
11. Longfellow, H.W., *The Poetical Works of Henry Wadsworth Longfellow*,

363 pp., Boston, 1871 (第4年報) (ロンクフェルロー氏 詩集)

12. Tennyson, *Poems*, (現存せず) (第4年報) (テンニーソン氏 詩集)

以上文学関係であるが、これらのうち開成学校には1点も収蔵されていない。東京大学書目には、これらのうち6の *Oliver Twist* が見える。なお、1の Shakespeare 全集は別の版が入っている。札幌農学校所蔵の書目で東京大学・開成学校に入っていたのは驚くほど少ないのである。

< 語 学 >

1. Marsh, G.P., *The Origin and History of the English Language, and of the Early Literature It Embodies*, 15+574 pp., New York, 1877³ (第3年報) (マーシ氏 英語起源)
2. Whitney, W.D., *Language and the Study of Language: Twelve Lectures on the Principles of Linguistic Science*, 11+505 pp., 1877⁵ (第3年報) (ホ井ットニー氏 国語)
3. Soule, R.A., *A Dictionary of English Synonyms and Synonymous or Parallel Expressions, designed as a practical Guide to aptness and variety of Phraseology*, 456 pp., Boston, 1871 (第4年報) (『公文録』の「洋書目録」になし)
4. Walker, J., *A Dictionary of the English Language, answering at once the purposes of Rhyming, Spelling and Pronouncing* (第4年報) (『公文録』の「洋書目録」になし) (現存せず)
5. Johnson, S., *A Dictionary of the English Language* (第1年報) (現存せず) (ジョンソン氏 袖珍辞書)
6. Roget, P.M., *Thesaurus of English Words and Phrases; so classified and arranged as to facilitate the expression of ideas and assist in literary composition, revised by Barnas Sears*, 510 pp., Boston, 1867 (第1年報) (ロゼット氏 英語節用)
7. Webster, N., *An American Dictionary of the English Language, thoroughly revised, and greatly enlarged and improved, by Chauncey A. Goodrich and Noah Porter*, 72+1768 pp., Springfield, Mass., 1872, 1873, 1874 (第1年報) (ウェブストル氏 大英字書) 20部 (12部現存)

これらのうち、1と2の著者 G.P. Marsh, W.D. Whitney は、市河三喜編『英語学辞典』にもとりあげられている当時のすぐれた言語学者である。1つ注目しておきたいのは、6の Roget: *Thesaurus* が入っていることである。また、Webster 大辞典が20部入っているが、これは随分利用されたようである。たとえば、内村鑑三: *How I Became A Christian*, 1895 には、内村等7名の学生が各自の洗礼名を選ぶのにその附録を調べたことが記されている。¹²⁾

さて、これらのうち開成学校には1点も収められていない。また、東京大学に所蔵されていたのは、これらのうちでは3と7だけである。¹³⁾ (7の所蔵部数を知りたいと思うが、東京大

学の英書目録には所蔵部数は一切記載がなく、不明である)

< 経 済 学 >

1. Jevons, W.S., *The Theory of Political Economy*, 16+267 pp., London, 1871
(第1年報) (ジヴン氏 経済原論)
2. Jevons, W.S., *Money and the Mechanism of Exchange*, 18+349 pp., New York, 1876 (第4年報) (セヴン氏 貨幣及)
3. Smith, A., *An Enquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 781 pp., New York, 1877 (第1年報及第3年報) (人民致富)
4. Mill, J.S., *Principles of Political Economy, with some of their applications to Social Philosophy*, 2 vols., 616 pp., 13+603 pp., New York, 1872 (第1年報) (ミル氏 経済原論) 2部

3の *Wealth of Nations* は再度購入されていることに注意したい。これらのうち開成学校書目に見えるのは3と4であり、東京大学になって更に2が加えられている。

< 政 治 論 >

1. Mill, J.S., *Considerations on Representative Government*, 8+141 pp., London, 1867 (第1年報) (ミル氏 代議政体)
2. Mill, J.S., *On Liberty; the Subjection of Women* (第1年報) (現存せず) (ミル氏 自由之説)

< 哲学・倫理・思想 >

1. Mill, J.S., *A System of Logic, ratiocinative and inductive: being a connected view of the principles of evidence and the methods of scientific investigation*, 13+600 pp., New York, 1869 (第1年報) (ミル氏 論理術)
2. Mill, J.S., *Utilitarianism*, 96 pp., London, 1871⁴ (第1年報) (ミル氏 利用益々学)
3. Mill, J.S., *An Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, and of the Principal Philosophical Questions discussed in his Writings*, 14+633 pp., London, 1867⁸ (第1年報) (ハミルトン氏 理学試験)
4. Smith, A., *The Essays of Adam Smith* (第1年報) (現存せず) (アダムスミス氏 文集)
5. Hume, D., *Essays, Literary, Moral and Political*, 557 pp., London, 1870 (第1年報) (ヒウムス氏 修身及経済書抜萃)
6. Montagn, B., *Works of Lord Bacon*, 3 vols. (第3年報) (現存せず) (ベイコン氏 著述)
7. Burke, E., *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful, with an introductory discourse concerning taste*, 11+219 pp., New York, 1869 (第3年報) (バルク氏 高尚及美麗)

8. Emerson, R.W., *The Conduct of Life*, 288 pp., Boston, 1876 (第2年報及第4年報) (エメルソン氏 生涯行状)
9. Emerson, R.W., *Society and Solitude* (第2年報) (『公文録』の「洋書目録」になし) (現存せず)
10. Emerson, R.W., *Letters and Social Aims* (第2年報) (『公文録』の「洋書目録」になし) (現存せず)
11. Emerson, R.W., *Representative Men*, 285 pp., Boston, 1850 (第3年報) (イメルソン氏 代員)

政治論関係では、開成学校書目には2の *On Liberty* のみが見えるが、東京大学英書目録ではそれに更に1が加えられている。

また、哲学・倫理・思想関係を調べてみると、開成学校書目に入っているのは、1の *System of Logic* だけであり、東京大学になって、それに2と3とが加えられたにすぎない。ここでもまた、札幌農学校所蔵のもの（いずれも重要なものであると思われる）で東京大学・開成学校に入っている書目の少ないことに驚かされるのである。

なお、J.S. Mill のものは以上で6点となり重要なものはほとんど含まれている。前掲の *How I Became A Christian* の記述によれば、1期生の佐藤昌介などが当時 Mill を読んでいたという。¹⁴⁾

＜ 歴 史 ＞

1. Macaulay, T.B., *The History of England; from the accession of James the Second*, 4 vols., 23+394 pp., 8+359 pp., 8+413 pp., 391 pp., London, 1864-65 (第2年報) (マコーレー氏 英国史)
2. Palgrave, F., *History of the Anglo-Saxons*, 43+332 pp., London, 1869 (第2年報) (パーグレーヴ氏 アンクロサキソン歴史)
3. Gibbon, E., *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 6 vols., 30+593 pp., 14+593 pp., 16+643 pp., 15+636 pp., 14+604 pp., 16+623 pp., Boston, 1862 (第1年報) (ギボンス氏 羅馬史)

これらの3点のうち1と3の2点が開成学校書目に含まれているが、2は東京大学英書目録にも見当たらない。

＜ 自 然 科 学 ＞

1. Darwin, C., *On the Origin of Species by Means of Natural Selection*, 447 pp., New York, 1851⁵ (第1年報) (ダーウ井ン氏 フリヂン・ラフ・スピークス)
2. Darwin, C., *The Variation of Animals and Plants under Domestication*, 2 vols., New York, 1876² (第3年報) (ダー井ン氏 動植物)
3. Morse, E.S., *On the Systematic Position of the Brachiopoda*, 60 pp., Boston, 1873 (第3年報) (『公文録』の「洋書目録」になし)

2は、進化論3部作で1の書に書かれなかった動植物の変異に関する資料をまとめた、育種学（品種改良の学）の重要文献であると言われる。¹⁵⁾ 3の著者 E.S. Morse はわが国への進化論紹介者としてよく知られているが、上の論文は、腕足類を系統分類学的に正しく位置づけることを目的とする彼の研究の集大成されたものであるという。¹⁶⁾

なお、開成学校書目にはこれらは見当らず、東京大学英書目録に1と2が見られる。

*

以上、第2の範疇に入るもののうち英学史上重要視すべき英書を一瞥し、それらについて、東京大学・東京開成学校の英書目録も調べてみた。当時の札幌農学校には重要な文献がかなりよく網羅されていたことがわかるのである。当時の東京の高等教育機関の場合と比較しても、人文・社会・自然科学のいずれの分野においても、この北のはての農業専門学校の所蔵英書は（札幌農学校の方に欠けている英書を考慮に入れても）むしろ、より充実していたと言えるのである。

(5)

では、これらの農学校所蔵の英書は英学導入史の上にどのように位置づけられるか、より直截的な言い方をすれば、そこで教育を受けた人々の英学と直接どのように結びついて行くのか。その点については、すでに一二ふれるところがあったが、ここでは新渡戸稲造・内村鑑三の場合に限っていくつか具体的事実をみることにする。

1期生大島正健は新渡戸について、

「彼は恐ろしい読書家で英語を最も得意とし、在学4年の間に図書館にあった英書は理学関係のもの以外は殆んどすべてを読破したと言われているほどであった。」

と回想している。¹⁷⁾ 農学校所蔵の英書が国際人新渡戸を形成してゆくのである。文学関係では、先にあげた Shakespeare, Emerson のものなど当然読了したものと思われるが、新渡戸の回想記の中に次の1節がある。¹⁸⁾

「見るものは皆 primitive なもので自然其物であった。……一寸散歩しても人の子1人居ないで実に閑散……牧場にロングフェローの詩集を持って野にヒバリの声を聞き自然力の偉大な力に接す。」

農学校図書であった Longfellow の詩集などが学生生活の中にとけ込んでいたのである。

次に内村の場合を見よう。農学校所蔵の英米文学書のなかみが内村の血となり肉となっていったであろうことは疑いない。内村が歴史を愛好したこともよく知られるところである。ギゾーの『文明史』やギボンの『ローマ帝国衰亡史』は内村の愛読書であったが、先に見たように、ギゾー『文明史』は教室で授業に用いられたと見られるし、ギボン『ローマ帝国衰亡史』全6巻は、内村の入学時にはすでに図書館に入っている（(4)参照）。われわれは、*How I Became A Christian* の中の次の1節に、当時『ローマ帝国衰亡史』から学んだとみられる固有名を見出すことができる。¹⁹⁾

「わが基督信徒学士たち（1期生のことである——筆者）は彼等の家庭をもっていた、その

数人が一つ屋根の下に住んで。彼等の巢は大農場のまんなかに人間どもの住いから離れてあったので、我々は美しいゼノビアの都の名にちなんで、それを『荒野の都』とよんだ。」

学生時代のこうした歴史書の渉猟が歴史への関心をかき立て、それが『興国史談』（明治33年）などの著作へ結実してゆくのである。

さて、E.S. モースによって Darwin 進化論はわが国に紹介され、知識人に大きな影響を与えるのであるが、内村自身『種の起源』を自己の生涯と思想を決定した3つの書の1つに数えている。それは、前節で見たとおり、内村の入学時（明治10年8月）にはすでに図書館に収められている。当時（明治10～12年）、東京においてはモースが講義や講演で進化論の紹介につとめているが、札幌では内村がその原書を熱心に読んでいたものと推定されるのである。なぜなら、内村は明治14年7月農学校を卒え水産技師として社会に出るが、その年11月には札幌でキリスト教と進化論について講演をおこなっている²⁰⁾ からである。

こうして新しい科学思想は北のはてからも受容されてゆくのである。札幌農学校の図書館に収められた Darwin の著作は、北からの新しい科学思想の導入につながる重要な意味をもつものと言えるであろう。

以上、ここでは新渡戸稲造・内村鑑三の場合に限って、当時の札幌農学校に収められた英書とそこに学んだ人との直接のかかわり合いを垣間見たわけである。英書と係わりをもった者が彼等に限るものでないことはもちろんのことである。

(6)

札幌農学校では、1期生から3期生までは官費生として入学させたのであるが、その見返りとして5年間は開拓使に奉職する義務を負わせている。したがって彼等は、たとえ後に活躍の舞台を中央に求めていったとしても、最低5年間は必ず北海道開拓の中心となって活動しているのである。また、終生北海道にとどまった人々も少なくない。こうした意味から、当時の札幌農学校に収められた英書が北海道への英学の導入と結びついてくるのである。

英書が当時西欧文化受容の重要な窓口であったことは疑いない。今回の調査で札幌農学校の、当時の所蔵英書が、非常に充実したものであることを十分認識することができた。そのことは、同校が偉大な英学者を輩出し、わが国の英学の、そして文化の進展に寄与したことで決して無関係ではないであろう。

(1977年8月16日稿)

〔付記〕 本稿は昭和51年度北海道科学研究費一般研究補助金の交付を受けた研究の成果である。

— 註 —

- 1) *First Annual Report of Sapporo Agricultural College*, 1877, p. 35.
- 2) 『札幌農学校第二年报』明治11年, p. 151.
- 3) 教官名簿に記されていないが、大島は兼ねて豫科の英語を担当した。（『札幌同窓会第六十回報告』札幌同窓会, 昭和13年 所収宮部金吾筆「大島正健君小伝」参照）.
- 4) 『札幌農学校第二年报』p. 149.
- 5) 同書 p. 150.
- 6) 各年報（和文第一年報～第五年報）所載の「本学職員及生徒姓名録」によれば、各年度の教員（校

長を除く）・学生生徒数は次のとおりである。（明治 10 年度に予備科が開設されている）

明治 9 年	教員	4,	学生	24
明治 10 年	教員	7,	学生・生徒	67
明治 11 年	教員	10,	学生・生徒	69
明治 12 年	教員	9,	学生・生徒	89
明治 13 年	教員	9,	学生・生徒	105

- 7) *First Annual Report*, 20 pp., *Second Annual Report*, 8 pp., *Third Annual Report*, 13 pp., *Fourth Annual Report*, 9 pp.
- 8) 次のものは分類統計から除外した。
 1. 月報・年報等の報告書及び報文の類
 2. 英文目録及び公文録記載の英書目録の書名から内容を特定することができず、しかも旧蔵文庫に実物の所在せぬもの（1 点）
 3. 内容が 2 つ以上の分野に亘り分類できないもの（1 点）
- 9) 『英学史研究』第 3 号, 1971 年 所収拙稿「札幌農学校初期の教育と英学」参照。
- 10) ちなみに、和文年報の「生徒姓名録」によって各年度のクラスの規模（学生生徒数）を調べてみると次のとおりである。

明治 9 年	24
明治 10 年	4～20
明治 11 年	9～18
明治 12 年	8～22
明治 13 年	12～20
- 11) 『東京大学法理文学部図書館英書目鑑』（明治 10 年 9 月調査）及び『東京開成学校文庫書目英書之部』（明治 8 年）による。なお、東京開成学校は明治 10 年 4 月東京大学法理文学部となったものであるから、東京開成学校所蔵図書は当然そのまま東京大学所属になったものと考えられる。
- 12) 岩波文庫版・鈴木俊郎訳『余は如何にして基督教徒となりし乎』p. 29.
- 13) ちなみに、東京大学英書目録に W.D. Whitney: *Life and Growth of Language*, 1875 が見られる。
- 14) 前掲訳書 pp. 62-63 参照。
- 15) 八杉竜一『ダーウインの生涯』（岩波書店）、昭和 51 年 参照。
- 16) 渡辺正雄『日本人と近代科学』（岩波書店）、昭和 51 年 参照。なお、E. S. モースは 1878 年（明治 11 年）研究旅行の途次来道し札幌に滞在している。（E. S. モース・石川欣一訳『日本その日その日』2, 昭和 45 年 参照）。
- 17) 大島正健・大島正満補訂『クラーク先生とその弟子たち』昭和 33 年, p. 146.
- 18) 『恵迪寮史』昭和 8 年, pp. 70-71.
- 19) 前掲訳書 p. 58.
- 20) 同上 pp. 79-80 参照。（なお演題は「帆立具と基督教との関係」で進化論をキリスト教の教義と調和させんとする趣旨のものである。）また、内村の門下生である逢坂信悉氏の次の記述はそのことの傍証となろう。

「我が内村は在学中より早くも既にこの問題（創造か進化かという問題）に対し深い研究をなして居たのである。」（逢坂信悉『クラーク先生詳伝』昭和 40 年, p. 344.）